



山野辺 裕二
国立成育医療センター病院 医療情報室長

【第12回】 最終回 血を分けた君へ

普段は思わないものですが、私には「事故なんかで頓死しないよう、体を大事にしなくちゃ」と実感した経験が2度あります。

1度目は、医師国家試験の試験場からの帰り道でした。試験がすんでぼんやり歩いていたところ、横道から出てきた車にもう少しで轢かれそうになったのです。試験の合格はまず間違いないと思っていたので、「せっかく医学部に6年も通ってここまで来たのに、医師になる前に死ぬのだけは御免だ」と思ったものです。

2度目は、骨髄を提供する最終同意をしたときです。最終同意後、レシピエントの患者は移植の前処置として致死量を超える抗がん剤と放射線照射を受けるので、突然ドナーがいなくなっても後戻りはさかないからです。

●バラ色の人生？

私が骨髄バンクに登録したのは、バンクが正式にスタートして間もない頃です。友人の「骨髄を提供すると、提供者側の人生もバラ色になるらしいよ」という話に興味を覚え、軽い気持ちで登録したのでした。その後はほとんど登録したことなど忘れていましたが、結婚して子供もでき、10年近くたったある日、骨髄移植推進財団から分厚い封筒が届いたのです。「これは適合通知では……」封筒を開けると予感は一瞬現実になりました。

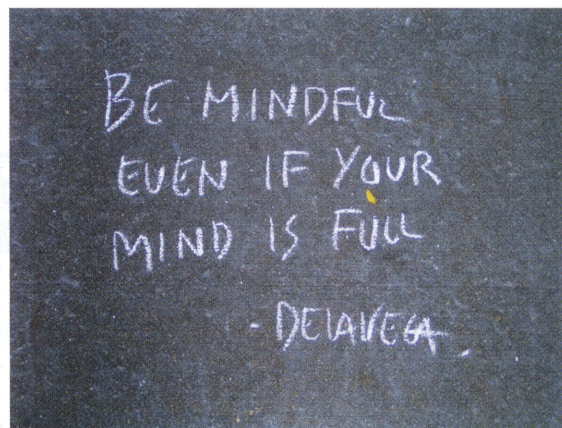
さまざまな段階を経て最終同意したあとは、私の体はもはや自分だけのものではなく、見知らぬレシピエントさんのものにもなりました。

●あっけない体験

医療者が患者の立場になると日頃見えないことに気づくと言います。その朝、私はストレッチャーに乗せられて手術室へのエレベータに乗りました。臥位では停止や発進の加速度が思いのほか不快で、乗り物酔いに似た気持ちの悪さでした。

手術室に入り、顔にマスクがあてがわれました。静脈麻酔薬の注入を告げる麻酔医の声のあと、意識が薄れていきます。ところが次の瞬間、目を開けると天井の蛍光灯が視界に飛び込んできました。まず思ったのは、「この照明は手術室でなく回復室のものだ」ということです。その後ようやく、(自分にとっては一瞬の間に)数時間の骨髄採取が終わったことを理解したのでした。私はそれまで外科医として1000回以上全身麻酔の覚醒に立ち会っていたわけですが、受ける側にまわるとこんなにあっけないものとは思ってもみませんでした。

骨髄提供の体験自体も、手術と同じく思いのほかあっけないものでした。もちろん「人生バラ色」になるわけでもありません。



マンハッタンの5番街100丁目の歩道上で見かけた、近所の芸術家の「作品」です。

しかし、宝物は確かにもらっていたのです。

●想像するから

バンクを通した骨髄移植のドナーとレシピエントの間では、一回だけ匿名の手紙をやりとりすることができます。私のところにも手紙が届きました。術前の自己血貯血量から「相手は子供かもしれない」と知らされていたのですが、手紙を読んでそのことが確認できました。少年でした。

私は手紙を出しませんでした。そうすることで、彼にドナーに対するイメージを描かせないために。街ですれちがう人々の誰かが、ひょっとすると自分と同じ血をもつドナーかもしれないと想像してくれることを祈って。そして確かに自分はその誰かによって命をもらったのだと感じてくれるように。

彼がその後どうなったのかも知る術はありません。でも、私は信じることにしています。彼はすっかり元気になって、どこかで勉強やスポーツに励んでいると。そして彼の体には私と同じ血が流れていると。

●かけがえのない存在

後になってふと気づいたことがあります。最終同意から移植までの間、彼にとって私は確かにかけがえのない存在でした。もし私が事故死でもすれば、彼も助からなかったでしょう。しかし実は、常に私をかけがえのない存在として必要としている人たちがいたのです。まずは家族(血のつながりの有無にかかわらず)。更には友人や仕事でつながりのある人たち。このように、自分をかけがえのない存在として必要としている人々を改めて実感したことで、私には人生の目的や優先順位といったものが、ちょっぴりクリアになったような気がしています。

ひょっとするとこの感覚は、骨髄を提供した人にだけ味わえるものなのかもしれません。未登録の方には、ぜひ骨髄バンクへの登録をお勧めします。

1年の間「読んでますよ」と声をかけてくださったたくさんの皆さま、ほんとうにありがとうございました。ではまたどこかで。

<http://inter.way-nifty.com/>

1986年長崎大学卒業。形成外科の勤務医として九州、四国の病院に勤務後、96年長崎大学病院形成外科助手。99年に念願の医療情報部門へ転籍、2000年長崎大学病院医療情報部副部長。03-04年米国マウントサイナイメディカルセンター医療情報学研究員。05年6月より現職。専門は医療情報学と病院管理学。自称外来語研究家、医療ジャーナリズム評論家。

